

創造的音楽活動に内在する対話の多層性

The Multilayeredness of Dialogue Intrinsic to Creative Musical Activities

根津 知佳子* 安藤 朗子** 甲斐 聖子**
Chikako NEZU Akiko ANDO Seiko KAI

和田 直人* 吉澤 一弥***
Naoto WADA Kazuya YOSHIZAWA

要約 本稿では、Williams Syndrome の家族支援を目的とした従前の音楽活動を改善し、新たに開発した活動について報告する。根津ら（2023）は、視覚空間認知に関する課題をもつ Williams Syndrome が抵抗なく参加できるように、スージー・リー作『なみ』を用いた「世界でひとつだけの音絵本づくり」を考案した。具体的には、Williams Syndrome の父親らがリーダーとなり、文字情報のない絵本の各ページに音をつけて録音し、一つの動画を製作するという活動である。製作過程での「対話の構造」に着目した結果、①他者との対話、②絵本との対話、③自己内対話（自分自身との対話）のうち、特に、③自己内対話が賦活されたことが明らかになった。その対話の中で、「過去の自分」や「こうありたい自分」への気づきが促進されたことから、根津ら（2020）が提示した「覚識の連続体（continuum of awareness）」のコンテンツとして有用であることが示唆された。

キーワード：創造的音楽活動、対話、ウィリアムズ症候群、家族支援、絵本

Abstract This paper reports on newly developed activities that improve upon previous musical activities intended to support families of young adults with Williams syndrome. Young adults with Williams syndrome have issues with visual-spatial cognition. In order to encourage their willing participation, Nezu et al. (2023) envisioned the “creation of an audio picture book that is the first of its kind in the world” using “Wave” by Suzy Lee. Specifically, the activity involves creating a single video, with fathers of young adults with Williams syndrome acting as the leader, recording with sound each page of a picture book without textual information. In terms of (1) dialogue with others, (2) dialogue with the picture book, and (3) internal dialogue, the third form of dialogue [(3) internal dialogue] was particularly activated as a result of focusing on the “structure of the dialogue” during the creation process. This dialogue promoted an awareness of one’s “past self” and “ideal self,” which suggests that it is useful content for the “continuum of awareness” as described by Nezu et al. (2020).

Key words : Creative musical activity, Dialogue, Williams syndrome, Family support, Picture book

* 人間生活学研究科人間発達学専攻
Graduate School of Human Life Science
Division of Human Development

** 家政学研究科児童学専攻
Graduate School of Human Science and Design Division
of Child Studies

*** 日本女子大学名誉教授
Professor Emeritus of Japan Women’s University

1. はじめに

筆者らは、小児科領域の難治疾患であるウィリアムズ症候群（Williams Syndrome、以下ウィリアムズと表記する）の患児の家族や医療関係者の依頼を受け、2001年度より22年度にわたって音楽キャン

ブを開催している。2歳から32歳の40名（のべ241名）の患児・者と、のべ450名の家族が参加してきたこの音楽キャンプ（ハッピーウィリムン）は、米国とアイルランドにおける家族支援団体の活動視察を基盤としつつ、日本の文化や家族のニーズを反映させながら発展させてきたものである。活動初期に幼児だった参加者も社会参加する世代となり内容の改善が必要となってきたことから、新たな支援方法を検討するために、17歳から28歳の7名の被験者に対して投影法心理学検査（①ベンダー・ゲシュタルト検査②ロールシャッハ・テスト③風景構成法）を実施し、臨床心理学と構成学による解釈を行った¹。その結果、ウィリウムズの特性とされている社交性や表出言語に関する従前の言説とは異なる結果を見出すことができた。

さらに、表出に関して緊張感や不安感、まれに敵意が見られ抑制気味である点、対人面において不安と萎縮が見られる点を踏まえ、心身のリラクゼーションや感情の表出を保障するようなパフォーマンスを軸とした新たな支援モデル（覚識の連続体）を提示した²。精神医学と芸術療法（音楽療法）の理論に依拠したこの支援モデルに則って、「図と地の分化」に焦点を当てた活動コンテンツを開発し、前報告（2023）では、次の4点について報告した³

- ① 覚識の連続体の理論的妥当性（吉澤）
- ② 覚識の連続体を軸とした音楽活動（根津）
- ③ 絵本やアニメーション等の文化財を活用した活動（和田・甲斐）
- ④ 家族支援のための基礎資料としてのきょうだいにに関する文献研究（安藤）

本稿では、視空間認知における「図と地の分化」に課題を持つウィリウムズにとって心理的な抵抗がない「②と③を融合させた活動（世界でひとつだけの音絵本づくり）」の開発と実践過程を報告する。それに先立ち、解釈のツールについて概観する。

2. 対話の構造

織壁・根津（2023）は、近年、「主体的・対話的で深い学び」が重視されていることを受け⁴、「授業における対話」のモデル（根津2018, 2022）⁵を保育実践と創造的音楽活動で活用することを試みた⁶。その際、「対話的な学び」が単なるコミュニケーションや会話レベルに留まらず非言語的表現をも含

みいれることを重視し⁷、「保育における対話」として改訂した⁸。

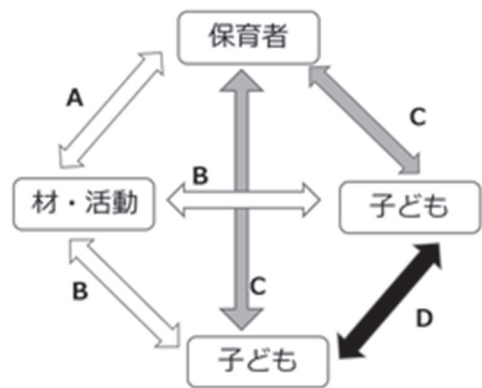


Fig.1 Dialogue in childcare practices

第1の対話 材・活動との対話（A & B）

第2の対話 他者との対話（C & D）

Fig.1に示すA～Dの「対話」とは、保育実践の時間や空間における身体的自己と環境（他者、材・活動）との「関わり」を意味している。各々の「関わり」の質は異なるものの、保育者同士が簡便な解釈のツールとして共有できることを企図して「関わり」を「対話」としている。

解釈の例として、2021年にウィリウムズを対象として実施した『おとえほん』を活用した活動のエピソードを記す。以下のエピソードは、青い丸群と赤い丸群があたかも会話をしているかのように描かれたページについて楽器（オタマトーン）で「自分の気持ち」を即興表現した際の記録である⁹。楽器による非言語的なやりとりと言語によるやりとりの「食い違い」と「不思議な共感」が記録されている。

【エピソード】¹⁰

リーダー（学生）がK（30代前半男性）さんに楽器で何を表現してたか尋ねると、Aさんは「仕事がつらいことを表現した」と応える。その後、Bさん（20代前半女性）に同じ質問をすると、「『そうだね。つらいね』と応えました」と言った。自分の中だけで考えたことをオタマトーンの音のみで表現する活動であるため会話が成立する可能性は低い。それにもかかわらず、2人の間で「つらい」「そうだね」

という共感の会話が成立してしまっていることに対して、他の参加者やスタッフの全員から思わず笑いがこぼれた。

一見、絵本に描かれた青丸群と赤丸群との会話が展開されているかのようにであるが、第2の対話である絵本との関わりは表面的であり、第1の対話である両者の会話も深まらないまま共感が成り立っていることを照射している。

絵本の情報（文字・記号）を介して文化内容や知識を得る関係を「認識論的關係」とした場合に、仲間づくりなどの「存在論的關係」を重視するあまり、学びが成立しない状況に陥る場合がある。このような対話の構築の順序性・接続性に関して森脇（2018）は、「認識論的關係」が「存在論的關係」を基盤として成立することを重視している¹¹。この『おとえほん』のエピソードは、後者に重心が偏っている例といえる。

一方、心理学的支援として絵本の読み聞かせを行った結果、発話が絵本の内容に関するものへ変化したという田中（2020）の報告は、他者との関係性の構築によって材・活動を共有する態度が変容することを示唆している。換言するならば、関係性の構築が心理的側面だけではなく認知的側面に対する心理的援助として有用であることになる¹²。この両者のバランスをとるためには、ウィリアムズの特性や生活年齢に配慮した材・活動の選択が求められることになる。

ところで、河合（2001）は、「絵本の中には音も歌もある」とし、文字として描かれていない絵本の「音」や「歌」や「音楽」に「耳をすます」ことは「心をすます」ことであると述べている¹³。このことは、絵本から音・音楽を想起する活動には、知覚・認知するレベル（意識レベル）が活性化されるだけではなく、過去の記憶を喚起し（前意識レベル）、本人が自覚していない領域（無意識レベル）を賦活する可能性が内在することを示唆している。

しかし、前述したように当該エピソードにおいて、「材・活動」との関わり（第1の対話＝A&B）が深まらないまま、他者との関係や交流（第2の対話＝C&D）に浸潤されている。その原因として、『おとえほん』によって、オノマトペによる声やリズムの変化を楽しむことはできるものの「耳をすます」「心をすます」というレベルに達することが難しい

点を指摘することができる。つまり、成人期のウィリアムズに適した材・活動ではなかったことになる。

この点について、織壁・根津（2023）が幼児とウィリアムズの成人家族を対象とした活動において、同じ材（『かけるかける』）に対して異なる思考プロセスを経ることを明らかにした報告に触れる。

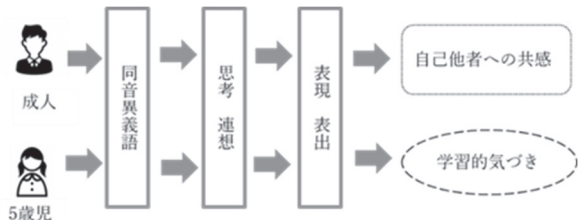


Fig.2 Different views of homonyms according to adults and 5-year-olds

5歳児と成人のウィリアムズを対象とした同音異義遊びを比較した際に、5歳児の表現・表出が主として「学習的気づき」であるのに対し、ウィリアムズは、「自己他者への共感」が主であった結果について織壁は、以下のように述べている（下線は根津による）¹⁴。

5歳児は他者から刺激を受け、共有することが学びを助長させ、大人の場合は発信者の背景や心情などを想像した上で他者が発信者全体を感じようと、感情を寄せて共感し、共有するなどの二次的な効果が人と人との間に生まれた。

（中略）“かける”の表現の違いから、他者と自分との違いに気が付いたり、自分を誇りに思えたことで自信をもち、自己肯定感を高める機会となつたに違いない。これまで以上に他者に関心をもち、その人がもつ背景や心情を想像することで、他者への理解を深める活動となった。

本稿では、「自己や他者へ気づき」を引き出すことのできる「創造的音楽活動のデジタル化」という手法と実践（根津）を報告（安藤・根津）する。そして、文化財の検討（甲斐・和田）と全体考察（吉澤・根津）を通して、創造的音楽活動における対話の特性を明らかにし、支援モデル（覚識の連続体）としての可能性を考察する。

3. 活動の概要

本稿では、2023年8月4日（金）から8月7日（月）の期間内に実施した「児童文化財（絵本）」に音をつけるという創造的音楽活動のデジタル化の過程における対話を検討する¹⁵。解釈のツールとして、織壁・根津（2023）による保育における対話の構造を改変した「家族支援における対話の構造」を用いる。

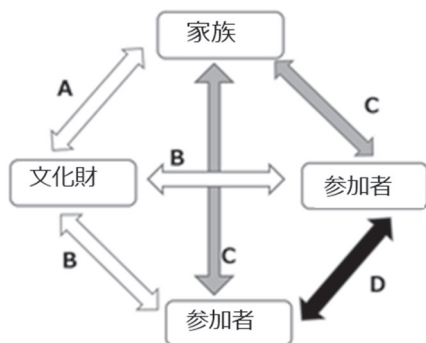


Fig.3 Dialogue in family care practices

3-1. 絵本の選択

筆者らは、2021年度に、仕掛け絵本のDie Cut技法を用いた『エイトラさんのへんしんどうぶつえん¹⁶』『おとえほん』、2022年度には『砂の城¹⁷』『蜃気楼2022¹⁸』などの文化財（絵本やアニメーション）を介した活動を開発してきた。いずれも、ウィリアムズの視覚空間認知の課題である「図と地の分化」に焦点を当てた活動である。

その他にも2021年度の『あの童話どうなったっけ』において、既存の童話を自由に展開させイメージの世界を膨らませる活動を行った。また、あいまいな情報を捉えるための感性を育む教材として、『ちぎり絵しりとり』『ことばとぞうけいの時間＝オノマトペ』なども開発してきた¹⁹。

本稿では、前述した『おとえほん』実践を改善し、文字のない絵本として幼児から成人までを対象とすることのできるスージー・リー作『なみ』を選出した²⁰。

最も大きな理由は、2019年度以来4年ぶりに対面で実施した音楽キャンプの開催地が海辺であったことが挙げられる。前述のように22年度にわたって開催している音楽キャンプと「海」は、密接に関

わっていることから、参加者にとって第1の対話が自然に促されると考えた。

何よりも、「寄せてはかえす波」の音は、参加者が滞在している宿舎で聞くことができる環境音であるだけではなく、過去の思い出ともつながる音である。ページが変わっても、ストーリーが変わっても「寄せてはかえす波」の運動は変わることがなく、安心できるものである。「1/f ゆらぎ」の間接的体験に身を委ねることによって自由な発想が生まれるのではないかと考えた。

3-2. デジタル化

筆者らの従前の音楽活動は、即興性や創造性を重視している点に特徴がある。これまで表現活動の一部をVTRの記録に残してきたものの、その過程すべてを残すことは困難であった。しかし、コロナ禍では、むしろプログラムをデジタル化することによって鑑賞の機会が拡大する可能性を見出すことができたことから²¹、活動の過程をデジタル化することを新たな試みとした。

具体的には、『なみ』の各ページをパワーポイントに貼りつけ、各ページに音を録音するという手法である。既成の楽器は使用せずに、声や身体、生活の中で使うモノ、音楽キャンプで製作した風鈴とサウンドスケープ（音風景）を録音した音のみの使用を認めた。

各ページの音づくりは即興性が強いが、何度も修正でき、各自が表現を確認できる点で有効である。また、方法がわかれば余暇活動に活用できるという利点もある。何よりも作品として残すことにより、いつでも鑑賞することができる。このことは、社会参加をしているウィリアムズにとって大きな意味をもつことである。

3-3. コトづくりからモノづくりへ

根津・松本（2023）は、これまで音楽キャンプで創出してきた「モノづくり」の過程をSmall, C.（1998）の“musicking”に依拠して「コトづくり」として捉えなおした²²。その結果、実践者（根津）が提示した設計者（松本）への条件である①～⑦のすべてを“ミュージッキング”として位置づけることができるようになった。

① 参加者全員が直接木材に関わる体験を重視する。

- ② 電動工具は使用しないで、各自が木材を切る時のテンポ、音色などを感じあえる場を創る。
- ③ 参加者には最後まで何ができるかをわからないようにする。
- ④ 場（セッション）においては、演出も含めて実践者も設計者も対等に加わる。
- ⑤ 全員で一つのものをつくるプロセスを重視する。
- ⑥ 生活での活用を考えるきっかけを提供する。
- ⑦ 音楽が再生される瞬間の期待・緊張感を共有する。

以上から、本稿における創造的音楽活動のデジタル化は、「モノづくり」から「コトづくり」への転換と相補的な位置関係にある「コトづくり（創造的音楽活動）」から「モノづくり（絵本のデジタル化）」と位置付けることができる。

3-4. グループ構成

ウィリアムズを3グループに分け、父親を各グループのリーダーとしてキャンプの2日目から3日目にかけて製作活動を行った。ここでは、弟をもつ2名（男性A、B）と兄をもつ女性（C）からなるグループについて報告する。

4. 家族支援としての立場から（安藤）

今回の絵本の活動は、父親が自分の子ども以外の子どもも含めたグループのリーダーとなって活動を進めたが、それは初めての試みであった。筆者は、ウィリアムズのA（男性）、B（男性）、C（女性）とAの父親の4人グループの活動に加わったので、そのグループ活動について考察する。

Aの父親は、穏やかな態度で、ウィリアムズたちがどうしたいのかを聞き出していた。3人とも初めのうちは、何をすればよいのかわからず、困っている様子がみられた。

最初にAが「無料魚とり in Japan」という言葉を発すると、父親は、すぐにそれをテーマとして話を展開していこうと決めて皆に呼びかけた。その呼びかけで皆は、「魚をとりにいくこと」をテーマにして、絵本のストーリーや場面ごとに音を付けていくという目的を共有することができ、創造活動に入ることができたようであった。

その後も父親は、ウィリアムズたちの自発的な発

言を促しながらも、A、B、Cたちそれぞれが得意なことをよくわかっており、それらを発揮できるようにリードしていったことがうかがわれた。作品が完成したときには、ウィリアムズたちは自分たちの作ったストーリー（「無料魚とり」が「無料貝殻とり」に変更された）に満足し、達成感を味わっている様であった。そして、父親もとても楽しそうにエンドロールの装飾に何度も修正を施し、完成を喜ぶ姿がみられた。また、その時父親から、以前は活動中に仕事のことを考えたりもしていたが、定年を過ぎて働き方が変わったからか、今回は自分自身が活動に集中して参加できたというような話が語られた。

以上のような活動を観察し、父親がリーダーとして、自分の家族だけでなく他のウィリアムズにも関わる経験は、父親にとっては、第三者的な参加ではなく、自分自身の活動として向き合う体験になったのではないかと考えた。これまでの、ウィリアムズの保護者として自分の子どもの活動を見守る、支援するといった立場であったものが、自分以外の子どもが加わり、活動の推進役を担うことで、活動自体によりコミットする経験となったのではないかと考えられた。父親が活動のリーダー役を務めることは、父親は精神的に負荷をかけられることになるかもしれないが、そのことは決してマイナス要因とはならず、これまで経験していなかったような活動への集中や満足感に繋がったということが注目される。

また、子ども側にとってもこの活動の利点が見い出された。B、Cにとっては、自分の父親以外の父親から、自分自身の長所を引き出してもらい、皆にほめられる体験につながった。それらの体験によって、自分の能力に気づいたり、自信をもったりすることができたのではないと思われる。Aにとっても、自分の父親のリードによって自分が提案したテーマで絵本のストーリーが展開していき、見事に完成したことにより大きな満足感を得ることができたようであった。

以上のように、家族支援の視点からみると、父親をリーダーとして、自分の子ども以外の子どもも含めたグループ編成で活動を行うことは、ウィリアムズ自身にとっても父親にとってもそれぞれに有意義な活動であったのではないかと考察された。

そして、このような有意義な活動が実現できた要件として、以下の3点をあげておきたい。

1 点目は、父親が自分以外の子どもの特性をよく

理解していること、2点目は、一人ひとりの個性や自発的な発想を尊重し、自由な雰囲気の中で創造活動が行われたこと、3点目は、父親の個人的な問題ともいえるが、父親が精神的に余裕をもって活動に参加することができたことである。

1点目は、父親が音楽キャンプに長年参加し続けてきているということが大きく関連している。この父親を含め、音楽キャンプに参加している親たちは、自分の子どもと同様に他の子どもたちに対しても愛称等で親しく呼びかけ、よく関わっている。また、参加者全員一緒に多くの活動を経験してきたことから、子どもたちの特性をよく理解することができると推察された。

2点目は、ウィリアムズの音楽キャンプで主催者側が大事にしてきたことである。すなわち、父親が、主催側の考え方や活動プログラムの趣旨をよく理解しているからこそ行うことができたと考える。

3点目は、親の活動への参加態度には心身の状態が関連していること、さらには心身の状態に、年齢段階による心理社会的な特徴が影響することについて指摘するものである。たとえば、父親の職業上の責任や地位等は、年齢と共に変化し、それが心身の状態に影響し、キャンプの活動への取り組みにも影響を与える可能性があるのではないかと考える。この父親の場合は、職業上の責務から解放されたことによって、活動によりコミットすることができたことが父親の語りからうかがえた。

5. 素材としての『なみ』の可能性（甲斐・和田）

5-1. 『なみ』から引き出された創造性

絵本『なみ』は特別横に広い判型によって、開くと山並みから砂浜そして海へとつながる水平線のラインがひと続きに見え解放感のある景色が広がる。この絵本は本文部にいわゆる文字情報がなく、文字なし絵本の態をなしており、読者が様々な物語を紡ぎ楽しむことができる絵本である。

簡潔にストーリーを紹介すると、母とともに海に遊びに来た女の子の夏の日を表したものである。

海に向かって勢いよく走りだした女の子は、「なみ」に興味を持つも恐れもあり、用心深く眺めたり対抗してみたりとはじめは一定の距離感を保っているが、12場で大波を浴びた後、砂浜にたくさんの貝殻を見つける。寄せてはかえす「なみ」との追いかっこを楽しむうちにふたつの世界はひとつにな

る。本文の先、後ろ見返しには、表見返しにはなかった貝殻が描かれ、裏表紙はスカートの裾を袋わりにたくし上げ、貝殻をいっぱい抱えた女の子が、満足気な表情で立つ。女の子は、波との交流を通して、特別な夏の日を過ごしたのである。

一年に一度の音楽キャンプは、参加者としても楽しい再会の時、交流の場である。海辺が近く潮のにおいに囲まれたキャンプ地において、本絵本を使ったウィリアムズは、浜辺での出来事というテーマはもちろんのこと、参加者たちと共に絵本を鑑賞し、じっくり絵本に向き合う時間となった。他者がどのようにストーリーを解釈し、どんなことを感じるのか、また最終的にどんな作品に仕上がるのか一連の活動を同じ空間で共有することで、相互にたくさんの気づきをもたらすことが期待できる。目から入る情報からそれぞれが独自の物語を創造し、それを音にして、立体化していくそのプロセスもまた、絵本を味わう活動として創造的であるといえる。

参加者たちが作った作品からは、「効果音」「ナレーション」「セリフ」「背景音」と様々な種類の音がみられた。これは、アニメーションにおける音の構成要素をほとんど網羅している。

またそれが、キャンパーたちの環境や体験を有効に活用したものであることが作品のオリジナリティにさらに寄与している。海辺ならではの波の音の採集や、賑やかなカモメたちの声色も、実際のカモメの鳴き声を参考に工夫がみられた。女の子に帰りを促す母の声も温かく安心感のある声だった。セリフをいうタイミングや声色の調整なども、参加者たちが構成を話し合い出来上がったものである。

このことは、参加者たちのアイディアとして自然と創出されたものであるが、絵本の中に繰り広げられる物語世界と、自分たちの居る海辺のキャンプ地での数日を重ね、それぞれ体験した事物を、音作りにそのまま反映していることがうかがえる。

以上のことから、絵本『なみ』の音作りの活動は、今回キャンプ地が海辺であったことも後押しし参加者たちの創造性を引き出す適切な素材であったと言える。（甲斐）

5-2. 『なみ』から引き出された創造性

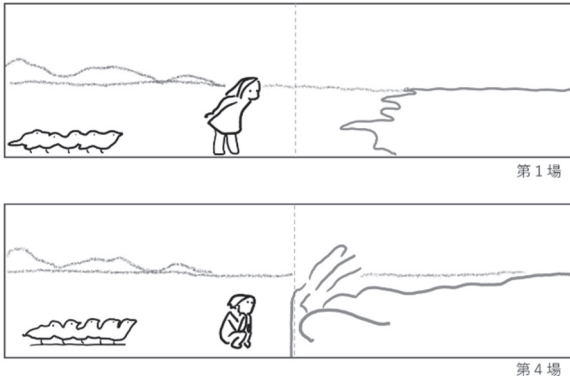


Fig. 4 Layout of visual information on facing pages

絵本の短辺を閉じた横開きの判型によって、横長の見開きに水平線を作り出している。水平線が見開きの中央を分断しており、遠方に山が描かれているが地上の空間には、女の子と鳥しか描かれておらず、遠近情報の取得を苦手とするウィリアムズには画面情報が少ない読み取りやすい内容になっている。遠近手がかり情報をそれほど必要としない絵本であるため、今回の活動の題材には適した絵本といえる。見開きの一面を子どもの世界、もう一面を波の世界に設定しているので、山、鳥、女の子、海の波といったカタログ的な表現の組み合わせは、空間をカタログ的な描き方で表現するウィリアムズの感覚に合致しているともいえる。

ところで、共感覚 (synesthesia) とは、「文字に色が見える」「ある色を見ると音を感じる」など、1つの感覚刺激から、複数の知覚が無意識に引き起こされる知覚現象として一般的に知られている。今回の活動は、絵本の絵を「視覚」で認識し、そこから音という「聴覚」という新たな感覚へ結びつけるという感覚運動特性がある。この知覚現象を拡大解釈して用いるならば、絵本という視覚的情報から音という聴覚情報へ置き換えた今回の即興活動は、ある意味において「共感覚と関連した絵本づくり」の可能性を検討できるのではないだろうか。(和田)

6. 考察 (吉澤・根津)

6-1. 対話と「覚識の連続体」との関係

ここでは、別のグループのDさんの記録に基づき²³、対話について、気づきのプロセスを整理し、「覚識の連続体」との関連を検討する。

【お母さんの声が表現できないD】

昨日の録音を基に、各スライドに声を入れていった。女の子の役はEが、波の役をDが担当した。お母さんが女の子を迎えに来るページでは、Eは、お母さんが「さあ、帰ろう」と言っており、女の子は「まだ、帰りたくないよ～」と言っていると言ったので、Dがお母さん役をすることになった。この場面を録音したが、それを見ていたEの父親が、「やり直し」と言い、「お母さんの声が怖いよ。もっとやさしく、やさしいお母さんだよ」と言った。Dは、再度「帰ろう」と言ったが、声色が平坦で硬く、命令する口調であった。私(記録者)は、「帰ろうと言いつ切るんじゃないくて、帰ろうよって誘う感じたよ」などと言ったが、Dの声は変わらなかった。それを見ていた根津先生も「Dさんも小さい女の子に話すときはやさしく話すでしょ」などとアドバイスをした。「お母さんの表情を見て。口が上がってるよ。笑ってるよ」と言われても、Dはじっとお母さんの表情を見て、目に涙を浮かべながら考え込み、急に鉛筆をもち、時々なにかを書こうとするように鉛筆を動かしながら考え込んでいた。

Dは、絵本『なみ』を使って自分の声や表現を他者と共有することで、自己内対話を促進したプロセスを経験した。最初は、お母さん役を演じることになったが、お母さんの声が怖くてやさしくなかったことに気づいた。周りの人たちからアドバイスをもらっても、声色が変わらなかった。そこで、お母さんの表情を見て、目に涙を浮かべた。鉛筆で何かを書こうとした。自分の心の中にあるネガティブな感情や思考を表現しようとしたのではないだろうか。

【力を抜いていくD】

それを見た根津先生は、Dの肩をもみ、「リラックス～」と言った。Dは、少し表情がやわらぎ、周りもDを応援する雰囲気になった。そして、もう一度、「帰ろう」とお母さんの台詞を言うと、少しかたさがとれた。Eさんの父親も「よくなってきた」と評価した。そして、Dの声を再度録音した。

Dは、肩もみによってリラックスし、周りもDを応援するという場の雰囲気の変換後、もう一度お母さんの声を録音すると、声に変化ができ、少しやさしくなったことについてEの父親からの評価を受けることができた。次に、女の子と手をつないで帰る場面では、その声はやわらかくてやさしかったことから、Dは、「母親」のように女の子に話することができるという新たな役割や関係を見出すことができたのではないだろうか。そして、「母親」と女の子との間にある愛情や絆を感じたと推測することができる。この表現によってDは、これまでに体験したことのない自己認識や自己理解を深め、自分の潜在力や個性を発見できたのではないかと考える。

【やさしく、やわらかい母親としてのD】

その次のページでは、女の子とお母さんが手をつないで帰っていくページであった。ここでも、Eが女の子の台詞を考えて言った。私（記録者）は、Dに「お母さんは何て言ってるかな」と問いかけた。Dが困っていたので、根津先生は、「『どんなことして遊んだの?』とか聞くでしょ? Dさんがキャンプとかに行っただけのお迎えにお母さんが来てくれたときとか、お母さんはDさんになんていう?」と聞くと、Dは固い声でそっけなく「何したの?」と答えた。根津先生は、「そしたらお母さんは女の子になんていう?」と聞くと、Dは「貝殻ひろってきたの?」と言った。根津先生は、「それじゃあ、答え言っちゃってるじゃん」と突っ込んだ。Dは、「何してたの?」と言い直した。そして、その声を録音した。Dの「何してたの?」の声はやわらかくてやさしいものだった。

このようにDは、第2の対話（他者との対話）と絵本「なみ」という第1の対話（素材との対話）を通じて、また周囲の人との対話とかかわりを通じて、第3の対話である自己内対話が賦活された。

3-1で述べたように、絵本『なみ』は、波の規則性と揺らぎ、そして音の繰り返しという運動性を持っている。この素材は、Perls, F.S. (1971) や Boxill, E.H.が言及する「意識の連続体 (Continuum of awareness)」の感覚運動につながるものである。Dの例からも、感覚運動や身体のリラックスが自己

内対話に必要な要素であることがわかる。感覚運動は、自分の心身の状態や感情や思考に気づき、それらを表現し、変化させることができる能力であり、自分と他者との関係やコミュニケーションにも影響することがわかる。

6-2. 対話の発達水準

Dの対話で展開された水準を Fichtner, B.の理論から眺める²⁴。

フィヒトナーは、間主観性あるいは対話に関して、三つの基本的な形態を発達的な順序で提案している。第一の形態は調整である。これは、人々が共通の対象に向かって行動するが、それぞれの行動は外的に関連しているだけで、内的には分離している状態である。人々は自分の個人的な目的に応じて行動し、相互作用を内省することはない。第二の形態は協業である。これは、人々が共通の目標や問題に対して意識的に協力して行動する状態である。人々は自分とパートナーの行為と結果を調整し、必要に応じて影響を与え合う。人々は自分の声や表現を他者に伝えることができるという喜びや誇り、自分の感情や思考を変化させることができるという希望や勇気を感じる。最後の形態は内省的コミュニケーションである。これは、人々が自分の生きた知識を話したりシンボルを使ったりするプロセスで発達させる状態である。内省的コミュニケーションは、集団的な熟考や集団的主観性として具体化する。ここでは、相互作用システムが全体として内省と自己統制の焦点となっていく。

これを踏まえると、Dは、二番目の協業水準と考えられる。つまり、今後の可能性として三番目の内省的コミュニケーションを想定できるといえるのではないか。

6-3. 素材との対話におけるストーリー性について

今回は「世界でひとつだけの音絵本づくり」ということで、音作りに強調点があるものの、用いた絵本に文字が無いことから、多様なストーリーの展開や解釈が可能な素材でもある。このストーリーを作る点を考察したい。

絵を見て自由に物語を作るという投影法原理は精神医学の診断法のひとつ主題統覚検査 (TAT: Thematic Apperception Test) にも採用されている。これは、今回のようにグループで楽しく取り組む場

合には、想像力と創造性がとりわけ強く刺激される。Aの父親がリーダーとなったグループの作品を例にとると、当初提案された「魚取り」のイメージに沿って物語がスタートし、別のグループの代表の父親の愛称である「Japan」から効果音「ジャバーン」が連想され『なみ』の基調音を生み出した。また、女の子役のDを「素敵な声優として誕生」させることに新たな役割を見出し、絵本の最後は、未来志向の「うみ」で閉じる作品を完成させることができた。他者との相互的対話の中でついに「貝殻取り」のテーマが発見・共有され、物語は見事に収斂したと捉えることもできよう。こうした素材との対話プロセスは、集団と個人の違いはあるにせよ、エスキモーの彫刻家がトナカイの骨を根気強く彫り、ついに「あ、アザラシになった！」と叫んだ逸話を髣髴させる。本稿の文脈では自己内対話による創造に対応すると言えるのではないだろうか。

6-4. 「世界でひとつだけのおと絵本づくり」の可能性

以上、各専門分野からの有益な指摘や分析を受け、素材やツールの選択、創出の理念に関する視点、そして活動の距離感についても考慮することで、「世界で唯一無二の音絵本作り」の可能性を拡張されたと考えられる。

6-4-1. 素材の分析

甲斐が挙げた素材の特徴と分析を踏まえて考察する。絵本『なみ』は、特別に横に広い判型を採用している。山並みから砂浜、そして海へとつながる水平線のラインが一連の流れとなっている。本文中に文字情報は存在せず、波と女の子の境界が本の中央にあるノドに一致している。波がノドを越えて女の子に迫ったり、女の子が波に飛び込んだりする場面では、ノドが消えて一体化する効果がある。これは、素材自体が境界横断的な拡張を引き出すアフォーダンスを内在しているといえるのではないかと。

参加者たちは、各自の物語解釈に加えて、「効果音」「ナレーション」「セリフ」「背景音」といったアニメーションにおける音の構成要素をほぼ網羅した作品作りを行っている。その自由度と想像力は、高いレベルでの活動へのコミットメントを示唆する。次の文章内容から、参加者たちが感覚運動要素を発揮して、生活に密着した体験に意味づけしながら対話により自己洞察を深めるプロセスが確認できる。

「海辺ならではの波の音の採集や、賑やかなカモメたちの声色も工夫されており、実際のカモメの鳴き声を参考にしている。女の子に帰りを促す母親の声も温かく、安心感がある。セリフを言うタイミングや声色の調整などもキャンパーたちが話し合って決めたものであり、その結果として出来上がった作品である。」

和田は、遠近情報の取得を苦手とし、空間をカタログ的な描き方で表現するウィリアムズにとって、『なみ』の本は認知的にも感覚的にも取り組みやすい素材である点を構成学の観点から指摘した。また、絵本の絵を「視覚」で認識し、そこから音という「聴覚」という新たな感覚へ結びつけるという感覚運動特性を見出した。これは、ツールを選択や創出においてequityの観点をさらに推し進める分析と言える。

6-4-2. 活動における距離感について

安藤は、有意義な活動が実現できた要件として、父親が自分以外の子どもの特性をよく理解していること、一人ひとりの個性や自発的な発想を尊重し、自由な雰囲気の中で創造活動が行われたこと、父親が精神的に余裕をもって活動に参加することができたことを挙げた。こうした理解の深まりは、今回スタッフがキャンパーの活動グループに加わったこと、つまり参与しての観察というかわり構造の利点が生かされたと考えられる。スタッフと参加者との距離感の問題をあらためて提起しているといえるのではないかと。

7. おわりに（根津・吉澤）

本稿は、2023年8月の音楽キャンプの中のひとつの活動である「世界でひとつだけの音絵本」に焦点化した研究である。絵本『うみ』を介して「耳をすます」「心をすます」体験（コト）が作品（モノ）となっていく過程を通して、主体であるウィリアムズが自分や他者、材と関わりながら促進した自己内対話を分析した。そして「意識の連続体」のコンテンツとしての有用性と可能性を導き出した。

22年間にわたる音楽キャンプを貫く音楽の本質について、本稿の2. 対話の構造の「エピソード」でも言及した河合（2001）の思想の原点を紹介して本稿を閉じたい。河合は、『絵本の力』の中で『ヴァイオリン²⁵』を取り上げ、次のように述べて

いる²⁶。

「このおじいさんはもう来ません。来ませんけど、もっと確実なことがある。それは音が残っているということです。音楽は残っている。これはすべてのテーマに共通でした。やぎが死んでも音は残っている。ヴァイオリンがこわれても、ボディがこわれても残るものという、私なんかすぐ連想するのは、魂ということです。体がなくなってもまだ残っている。そういう意味で音と歌というのは、心をすましていたら聞こえてくる魂のひびきとっていいのではないかと思います。」

ユング派の心理学者である河合は、自らフルートの演奏も行い、音楽が人間の心にどのような影響を与えるか、どのような意味を持つかを追求した。そして音楽を「魂のひびき」と呼び、深層心理との深い関りを論じたのである。

本研究は、日本女子大学人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会において承認を得ている(539号)。

引用文献

- 1) 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人(2020):「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究—主として投影法心理検査を用いた解析—」,『日本女子大学総合研究所紀要』23号, pp.143-168
- 2) 根津知佳子・吉澤一弥・和田直人・角藤比呂志(2021):「ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス」,『日本芸術療法学会誌』,第51(2), pp.44-53
- 3) 根津知佳子・和田直人・安藤朗子・甲斐聖子・吉澤一弥(2023):「ウィリアムズ症候群における「図と地」の多角的検討」,『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』,第29巻, pp.261-269
- 4) 文部科学省(2017):『幼稚園教育要領』フレール館 および文部科学省(2018):『幼稚園教育要領解説 https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf (2023年10月25日最終アクセス)
- 5) 根津知佳子(2018):「事例シナリオの評価方法」,『PBL 事例シナリオ教育で教師を育てる教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法』,第5章 p.48, 三恵社
- 根津知佳子(2022):「PBL 対話的事例シナリオ教育カリキュラムの評価のあり方」,『対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究』2019年度～2021年度科学研究費補助金基盤(C)報告書(山田康彦代表), 三恵社
- 6) 織壁佐和子・根津知佳子(2023):「ライフステージを展望した材の活用と実践」,『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』,第29号, pp.67-75
- 7) 無藤隆編(2017):『平成29年告示幼稚園教育要領まるわかりガイド』,チャイルド本社, p.37
- 8) 織壁・根津(2023), p.69 Fig.2
- 9) 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人:「ウィリアムズ症候群のための“支援プログラム”の開発～投影法心理検査を基盤として～」,『日本女子大学総合研究所紀要』,25号, pp.91-118(2022)
- 10) 前掲論文, p.103
- 11) 森脇健夫(2018):「事例シナリオを用いたPBL教育」,『PBL 事例シナリオ教育で教師を育てる 教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法』, pp.23-40, 三恵社
- 12) 田中元基(2011):「認知症高齢者と絵本を読むことの臨床発達心理学的研究」,『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』,18, pp.97-114
- 13) 河合隼雄・松居直・柳田邦男(2001):『絵本の力』,岩波書店, pp.15-43,
- 14) 織壁・根津(2023) pp.72-73
- 15) 第22回ハッピーウィリムンの記録集, 2023年8月31日発行
- 16) ロイス・エイトラ作(1997) 偕成社
- 17) The sand castle <https://www.youtube.com/watch?v=hzyqmoPu2H4> 最終閲覧2022年10月23日
- 18) 和田直人作(2022)
- 19) 日本女子大学総合研究所 研究課題76(2022) 資料集Ⅲ
- 20) スージー・リー作(2009):『なみ』,講談社,

ISBN : 978-4-06-283035-5

- 21) 根津知佳子 (2021) : 「コロナ禍における” 集団的即興”」, 『活動理論研究』, 第 6 号, pp.13-25
- 22) 根津知佳子・松本金矢 (2023) : 「“モノづくり” と “コトづくり” の融合 一 家族支援におけるミュージッキングー」, 『日本女子大学 紀要 家政学部』, 第 70 号, pp.9-18
- 23) 音楽キャンプのスタッフ目白大学児童教育学科助手川見夕貴氏のフィールドノートによる。
- 24) Fichtner, B. (1984). Co-ordination, co-operation and communication in the formation of theoretical concepts in instruction. In M. Hedegaard, P. Hakkarainen & Y. Engeström (Eds.), Learning and teaching on a scientific basis. Aarhus: Aarhus Universitet, Psykologisk institut (pp. 207–228).
- 25) ロバート・T・アレン文, ジョージ・パスティック写真, 藤原義久／藤原千鶴子訳 (1981), 評論社, ISBN978-4-566-00242-5
- 26) 河合ら (2001) pp.42-43